

900年、つづく

民俗芸能

天津司の舞にふれる

「天津司の舞(テンツシノマイ)」は、天津司神社に伝わる田楽(でんがく)踊り。始まりは約900年前。脈々と受け継がれるそれは、「日本最古の人形芝居」とも云われ、古典的の神事芸能として専門家たちにも高く評価されている。五穀豊穡、無病息災、そして邪気払い。地域への祈りを重ねる春の祭礼は、どのような祭りかで、どのように現代まで受け継がれてきたのだろうか。

からくり人形が春を舞う 日本最古の人形芝居

小瀬町に伝承される「天津司の舞(テンツシノマイ)」は、毎年4月11日前の日曜日に行われる天津司神社の春の祭礼だ。太鼓、笛、ピンザラなどを手にした9体のからくり人形と神輿が、行列をなして諏訪神社へおみゆき(移動)する。人形は顔に赤い布をかけ、諏訪神社へ到着すると境内の四方にめぐらした「御船」と呼ばれる幕の内に入って姿を隠す。芝居に登場するのは3体。幕の高さは1m以上あり、芝居を観る人が、人形の操作を窺うことはできない。

「登場するのは、御鹿島様、鬼様、御姫様です。顔の布は外し、お顔がみえる状態で演じます。芝居は、鬼様が御姫様を追い掛け、両手に小刀を持った御鹿島様が小刀を投げて邪気を払い、御姫様をお助けするという展開。この場面、お祭りのときは観客に向けて、木で出来た小刀を投げます。これを拾うと、無病息災のご利益があるといわれています」

芝居が始まったのは、約900年前。もともとは収穫の感謝を神様に捧げる「田楽」として旧暦の7月に行われていた。天津司神社に祀られている9体のからくり人形は、明治34年に作られたも

のだと、天津司の舞保存会・会長の山本正二さんは聞かせてくれた。

一子相伝で継がれた 900年と、これから

「12神物語」という古い民話がありまして。これは、甲府で最も古いとも言われる12人の神様の物語。かつて甲府全体は湖だったと云われていますが、その湖に12人の神様たちは船を浮かべて遊びます。民話には、飲んで食べて踊って過ごしている様子が書かれているそうです。天津司の舞に登場する9体の人形は、この民話をもとにしていると云われています。現在は9体ですが、かつては12体あったという伝承もあります」

天津司の舞の当日、午前中に保存会のメンバーが神社に集まり、祀られている9体の人形を組み立て、衣装を着せる。この行事を「オカラクリの儀」という。神様の化身である人形に触れることができるのは、成人男性のみで、子どもや女性には触れることを許されていない。「おみゆき」の際も「舞」の際も、そして組み立てた人形を解体する「オクスシ」の際も同じだ。

「もともと人形は小瀬地区の17軒の家に祀られ、組み立てや舞、笛や太鼓などの技術も家ごとに代々受け継がれてきました。一軒に一体ずつ、脈々と守り続けてきたのです。しかし、近頃になって問題意識を持つようになったのは後

継のこと。一子相伝の門外不出では、もしその家に男の子が生まれなかったら…、もし人形に触れることを拒否したら…、伝統はそこで途絶えてしまいます。17軒だけの役割にしておいてはいけなないと、出来上がったのが保存会です」

こう話す会長の山本さん。天津司の舞保存会は、小瀬の人なら誰でも入会可能で、現在は約300世帯が加わり、30人ほどが芝居技術を伝承している。

「自分のお祖父さんがやって、親がやってたことを僕たちがやるのは当たり前なもの。舞や笛・太鼓は、その地域にあるべきものなんです。資料が多く残っているわけではなく、笛や太鼓の鳴り物一つとっても楽譜があるわけではありません。伝えなくなったら、終わってしまいますから」と氏子総代表・中沢龍雄さんは言う。

地域の人がまもられて 文化として在り続ける

日本に暮らす人にとっては今も昔も、そしてこれからも、「祭り」は特別。地域が活気づき、神様の気配ある雰囲気彩られる。天津司の舞はかつて旧暦の7月(新暦の9月頃)に稲を刈った田んぼで、「収穫祭」の位置付けで行われていた。今で

はその年の豊作を願い、4月のお祭りとなった。「農の閑散期でもあり、人が集まりやすい」と中沢さんは言う。

約900年前に考案された日本最古の人形芝居のからくり人形は、パーツごとに麻の紐で結ばれている。加えて、祭礼に合わせて人形を組み立てたり、解体したりを行うことも天津司の舞の特徴だ。

「この舞を残すためには、文化財の保護が不可欠です。例えば人形の着物を新しくすることや、老朽化が進んでいる神社自体のこともあります。神社と祭りは密接に結びついていますから、神社が残るとお祭りも残る。どう残し、どう根付かせていくのか、もっと考えなければいけません」

天津司の舞には県内各所からイベント出演の依頼も多い。しかし、舞を奉納するためには人形に触れることができる小瀬の地域住民を含め、50人以上が携わることになる。「観るためのものではなく、地域の文化だから」と山本さんは言い切る。

約900年、変わらず舞が続くことと、絶えず変化を要される儚さ。その時々、困難を、どうにか乗り越え現代まで続く。時代が変わり、信仰のカタチが変わっても、神社や祭りをありがたく思う日本人の心は変わらない。

信玄公祭りの裏で隠れがちな甲府市の無形民俗文化財。その祭りは、時代によって少しずつルールを変えながら、失われずに続いている。



笛や太鼓も地域に受け継ぐために練習を重ねている



暖かい春の陽ざしの中、天津司神社から諏訪神社までおみゆき



境内の四方にめぐらした「御船」と呼ばれる幕の内に入り、芝居がはじまる



重要無形民俗文化財

天津司の舞
平成30年4月8日(日)正午ごろから
天津司神社(小瀬町)～諏訪神社(下鍛冶屋町)
900年つづく伝統芸能をぜひ見に来てください。



天津司の舞保存会・会長 山本 正二さん



氏子総代表 中沢龍雄さん